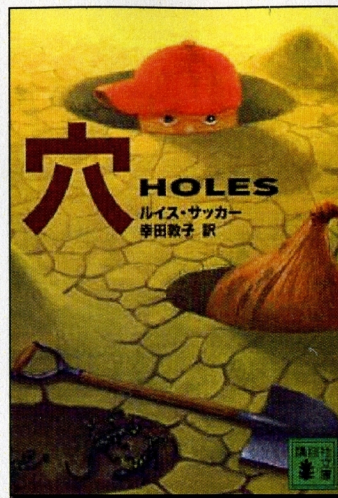


## 穴 HOLES

主人公は友達もなく、いつもまずい時にまずい場所にいて、まずい立場に立たされてしまう男の子。でも、この子はそんな運命を受け入れ、笑い飛ばしちゃうぐらい強いんです！しかし!!ある時無実の罪で少年院におくられるという人生最大の不運が…！少年院は、百年以上も雨が降らず強い日差しが照りつける場所。歩くだけでも辛いのに、毎日毎日直径1.5m、深さ1.5mの穴を掘らされるのです…。ストーリーの後半で出てくる、みずみずしいタマネギをシャリシャリかじる場で睡を飲み込むこと間違いない。

ルイス・サッカー／作  
幸田敦子／訳  
講談社（1999年）

※1999年版も所蔵しています。

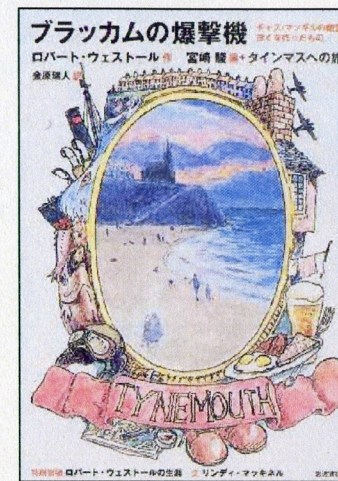


## ブラッカムの爆撃機

戦争を描いた小説は多いが、ウェストールの手にかかるとそこでは、人生の一コマが真実の「物語」として紡ぎ出される。表題作の爆撃機ブラッカムの無線士ゲアリーの体験した、インターカム（通話装置）から聞こえる過去の闇。戦争が始まった1939年、引っ越した屋敷で〔時〕を出し抜いて一人の女性の人生を変えた、少年チャスの物語『チャス・マッギルの幽霊』ほか。

ロバート・ウェストール／作  
宮崎駿／編 金原瑞人／訳  
岩波書店（2006年）

※1990年に出版された本（福武書店）も所蔵しています。



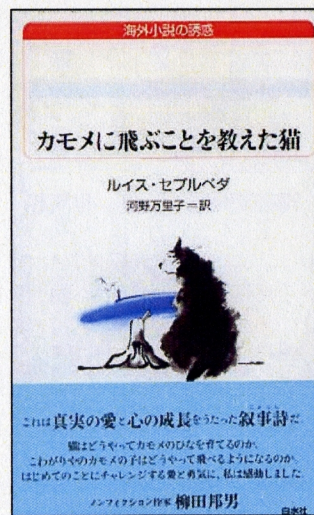
## カモメに飛ぶことを教えた猫

たとえ相手が誰であっても死を前にした者の願いは、何があっても叶えてみせる。それが猫の名誉であり誇り。

1匹が交わした瀕死のカモメとの約束を、全ての猫が力を合わせて守ろうとします。けれど、自分にできないことを、教えることなどできるのでしょうか？ なにより猫がカモメを愛し育てるなんて！ありえないことだと思います？

ルイス・セブルベダ／作  
河野万里子／訳  
白水社・白水Uブックス（2005年）

※1998年版も所蔵しています。



## 水曜日のうそ

毎週決まった曜日決まった時刻に姿を現す祖父と、そんな祖父を愛する一方で疎ましく感じる父。決まりきっていた「約束」がある日から「うそ」に。主人公はそんな複雑な家族の間で揺れる少女。家族だけでなくボーイフレンドとの関係でも悩みを抱えます。祖父母との別離という現在の家族問題を取りあげたもの。あなたも普段大切な人との何気ない時間を過ごしてはいませんか？読み終わるころにはきっと優しくなるはず。

クリスチャン・グルニエ／作  
河野万里子／訳  
講談社（2006年）

